

2020.8.1

紙つぶて

安楽死を頼まれた医師が患者を殺害したとされる事件がきっかけとなり、「死ぬ権利」が社会的な話題になっている。自分自身、苦しむだけで何もできない毎日になったら死にたいと思う気持ちにはわかるし、尊厳死を望んでいる。

しかし、そういう高度な議論は、「生きる権利」が保障された上でのものであるはずだ。身体が動かなくなり、介助してもらわなければならない「社会のお荷物だからいつそ死んでしまえば」と思う人はかなり多いのではないだろうか。

確かに介助は大変だし、人も巻き込む。交通機関に遅延が生じることもある。でもそんなこと以上に、その人が交通機関を利用できることの方が



「死ぬ権利」

水島 広子

ずっと価値あることなのではないか。

現在「死ぬ権利」と主張されているものは、「生きる権利」が確立していないことと関係していると思う。「死ぬ権利」とは、「権利」などではなく、追い込まれた揚げ句、ではないだろうか。うつ病の症状には自殺念慮もある。これは本人の「意志」と言えるだろうか。

自死は、最大の断絶である。「相談してくれれば…」という衝撃的な反応は、相談もせずいきなり断絶された、という心境を反映していると思う。これは本当につらい。

「生きる権利」をもっと充実させることが必要なのではないだろうか。

(精神科医)